

MacDonald Emslie, Goldsmith: The Vicar
of Wakefield
(Edward Arnold: London, 1963).

山本和平

本書はゴールドスミス(一七三〇—七四)の最もポピュラーな作品、小説『ウェイクフィールドの牧師』の作品論であり、デイヴィッド・デイシャスの編集になる「英文学研究」叢書の第九巻として刊行されたものである。

ゴールドスミスのこの小説は発表以来かなりひろく読まれ、わが国でも例えば漱石の有名な「則天去私」は、松岡譲によれば、この小説に体現されているらしいが、著者が「まえがき」でいっているようにその人気のわりにまともな作品論は、驚くほど少ない。本書はほとんど最初の包括的・集中的な作品分析であるといつてよい。

書評 (115)

作品論が評者の読後印象の主観的表白という形で発想されず、当該作品内部の使用言語や文体の分類・分析に集中するのは近來の(おそらくアメリカ「新批評」以来の)傾向であるが、本書も終始かかる方法にたつて精密な分類・分析が展開さ

れている。このような作品論においては、分類・分析がそれに依拠しておこなわれる主題要素の抽出ないし設定がほとんど決定的に論の成果を左右することになる。なぜならかかるテキスト密着性を身上とする批評研究は、いくつかの主題要素が作品全体の中から抽象されればあとはほとんど自動的にその主題に関連する各箇所がテキスト中から丹念に拾いだされ連れさえすればよいからである。その点で本書は成果をあげているといつてよいであろう。

二

叙上の意味からして本書の構成をまず示すことが順序である。

まえがき。第一章「作者のことば」。第二章牧師。1 話者と登場人物。2 ゴールドスミスの牧師。3 登場人物と「俗世間」。4 牧師と女性たち。第三章自然と社会。1 装飾と眞の価値。2 民間芸術。3 農村的価値(狡猾さの不足、貧乏の素朴、正直、農村的趣味の墮落、土着的価値の再確認)。4 風俗と道徳。5 性善説。6 心情の道徳。7 正義を緩和する慈悲。第四 章富と慈善。1 「富のきずな」。2 慈善の種類。3 小説のなかの「グッド・ネイチュア」。4 政治的と個人的。第五章情動と反応。1 情動の質。2 センチメントとセンチメンタル(オリアヴィアの墮落、牧師の苦悩、ジョージの名誉)。3 ヒューマニティ。4 偶然のアイロニー。第六章用語。1 修辭的特徴。2 You-thou の移行。3 同質化されていない散文。第七章筋の展

開。 1 偶然 2 逆転 3 「ボビエラーな」特質。 第八章評
価。

本書の内容は上記の諸項目の指示する範囲内においてそれぞ
れの個別的領域のカヴァする限り丹念にテキストが引用されて
いるし、個々の項目のとりあげ方は極めて包括的でこれ以上付
け加えるべきものはほとんどないといえる。したがってあとと
かかる作品論の方法にたいする批判をのべさえずれば充分なわ
けであるが、以下簡単にその主な内容を紹介する。

第一章で、この作品の「全体的意図は一八世紀共通のたのし
ませて教化することにある」といい、第二章ではまず「一人称
小説」であるこの小説において「牧師」の「語り手」と「登場
人物」との二つの職能はどのように処理されているかを具体的に
にテキストに則してその成果を分析し、後半においては前半に
みられる「語り手」による「人物」の批判的抑制が減じ、その
ため作品の出来栄えを損っていると説く。また登場人物は三つ
のグループ——都会的・世俗的世界の外にある牧師一家、ソー
ンヒルに代表される都会的世界の住人、第三に彼らの上に臨む
バーチェルリサー・ウィリアム——に類別される。さらに牧師
一家の内部における牧師と女たちとの関係で牧師の一人二役的
役割が論じられ、前半における牧師の女たちへの批判は主とし
て「語り手」の思いやりのある魅力的なアイロニーによってな
され、後半は「人物」としての牧師の直接的訓戒を通してなさ
れている、という。

第三章「自然と社会」は次章「富と慈善」と共に、この作品

にふくまれる価値的・イデオロギー的側面をとりあげる。一八
世紀小説の主要主題のひとつ「外見と真実」はこの作品のばあ
いも同じであり、「裝飾」は都会的価値であり、「真の価値」
は牧師に代表される「農村的美徳」——狡猾さの不足——にあ
るとされる。またゴールドスミスにおいては「貧乏」「素朴」
「正直」が等価関係におかれていたこと、また「都会的世界」
との接触のなかでの「農村的美徳」の墜落及びその価値の再確
認がなされていること、またゴールドスミスの倫理は本質的に
は心情の倫理であり、それは性善説を根幹としていること、し
たがって「正義」も「慈悲」によって和らげられていることを
指摘する。

第四章「富と慈善」は経済的要因によって人間関係が左右さ
れる側面の検討である。ゴールドスミスの経済的関心は、彼の
長詩『旅人』及び『荒れはてた村』においてもあらわれるが、
結局彼の理想は「贅沢や贅沢への希望のために本能的に上品な
行動規範が歪められることのない農村的環境での中流の裕福さ
の幸福」である。そして作品展開の動機づけにおいてかなり経
済的要因がはたらき、たとえば物語が牧師一家の破産という偶
然の経済的逆転によって起動され、また息子や娘たちのかなり
の富を約束される結婚という同じく経済的逆転に終るのだが、
かかる経済的関心は物語を一貫している。

またこれと関連して「気前のよさ」「性のよさ」が「慈善へ
の衝動の質」をめぐって分析され、サー・ウィリアムと牧師が
その対象としてとりあげられる。そして作者の君主主義的イデ

オロギーが『旅人』の詩句を引用しつつ抽出され、真の人間関係においては「富と法律の人工の鞆帯」ではなく「自然的鞆帯」の必要が説かれているという。

第五章「情動と反応」は、涙にむかうものを「センチメントとセンチメンタル」笑いにむかうものを「ヒューマール」の二つに分類し、たとえば前者に関しては、作者は後半、読者の感情にうったえようとして牧師に自己の窮状を語りせたりする（二八章）が、かかる自己中心性は、前半で確立された牧師の「性格」に一致しないことを作者は忘れてしているとす。

第六章「用語」では You-thou の移行に着目し、これに感情の揺れの反映を見ている点警抜であるが、第七章「筋の展開」の、偶然と逆転の指摘は平凡である。終章ではジョンソン博士、ヘンリ・ジェイムズ、G・オーウェル、D・W・ジェファスンなどの評価を引用しつつ、このポピュラーな小説『ウェイクフィールドの牧師』の評価のむずかしさを述べている。

三

以上本書の構成に則してその骨組を略述したがむろん本書の価値はかかる簡単な内容の紹介のなかにはない。そのテキストの主題要素別引用といういわば「資料」の豊富さに比して、そこからひきだされる結論は意外に平凡貧弱なのである。著者には小説『ウェイクフィールドの牧師』をひとつの全体像として再構築してみようという意図、あるいはある一定の視角から作品を裁断し、論証しようという意図は最初からなく、この作品

から抽出しうるさまざまな主題要素をほとんど孤立的・個別的に処理することに努力が傾けられているのである。

編集者のデイシャスが述べているように、この叢書の趣旨が「アメリカの『新批評家』のいくつかりかのような反歴史の立場とはならないが、作品の歴史的背景や文化的環境よりも文学作品そのものに集中する批判的研究」にあるとすれば、テキストに密着した分析方法にたつ本書は充分その趣旨に沿ったものといえることができる。

このテキストへの密着は文学作品の批評における必須の態度であることはいうまでもない。またテキスト密着性の点で本書はほとんど完璧のできればを示しているといつてよいであろう。しかしそれは必要条件ではあるがそれだけでは充分ではないとおもう。テキスト密着性が自己目的と化するときの危険もまたあるのである。すなわち、文化史的背景の無視という叢書の趣旨が実現される度合いに応じて、つまり作品論がテキストへの密着の意味での客観性を獲得し、したがって作品論から、評者のいわゆる「主観性」を排除する度合いに応じて、その論は統一体としての印象を弱め、各主題要素ごとに分類集めされた諸側面の統一なき羅列に終る危険をはらんでいる。

おそらく作品論の理想は、分析の精密化の過程が同時に、作品の世界像の構築・総合の過程となることであろう。テキストの正確緻密な読みという本叢書の趣旨も、より鮮明な全体像の定着をめざすときにはじめて充分に生きてくるのである。

たとえば第二章の「一人称小説」の技法的分析が、さらに第

三、四章の牧師の世界観乃至人間観との関連において——すなわち、文学的方法は作者の思想にかかわるものとして——深められたならば、作品の統一的把握が可能となるのではあるまいか。(註)この時テキスト密着という原則はいくぶん損われるであろう。そこには別の原則——作家の思想と文学技法の相関の存在が前提されるからである。

また「語り手」と「人物」との関係の指摘は小説技法の点で極めて重要である。しかしそれがこの作品の内部にのみ逼塞することなく、いわゆる「視点的人物」としての主人公をもつ十九世紀小説との関連において、歴史的に(小説史的に)論じられたならば作品論として一層厚味をまし説得的になりえたのではあるまいか。

テキスト密着性という原則にたつ客観性(具体的テキストを資料とするという意味での客観性)も、より高い次元での統一、より広い歴史的視野での展望を与えられないときは低次の、いわば資料的客観性、せいぜい分類作業にとどまらざるをえなく

なる。

しかし本書のように主題要素の抽出が妥当であり、また各主題に関して内容が網羅的に検出されているばあいにはそれなりの価値——すなわちそこから全体像を総合的に構築しうるような、より高次の批評を展開する基礎作業としての価値——をもっているということができよう。

(註) 拙稿「ゴールドスマスの思想と方法——『ウェイクフィールドの牧師』について——」*Critica*, No. 5, 昭和三七年、「ゴールドスマスの思想と方法——『荒れはてた村』を中心に——」『金沢大学法文学部論集文学篇』第九巻昭和三六年、および前者のほぼ忠実な英訳『The Vicar of Wakefield——An Interpretation, Hitotsubashi, *Journal of Arts and Sciences*, vol. 4, No. 1, March 1964』という意図をもつ試論である。

(一橋大学講師)